慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	思い出すままに
Sub Title	Memories of past
Author	蘇, 童(Su, Tong) 竹内, 良雄(Takeuchi, Yoshio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.2 (2009.) ,p.155- 176
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

思い出すままに

蘇童[1]著
竹内良雄訳

過去を語ろうとすれば、記憶のなかでまず浮かび上がるのはやはり蘇州の城北のあの古い家並みだ。[2]長い石灰石の街路は、灼熱の七月はほとんどうすい鉄さび色となり、[3]凍てつく師走は青黒い色合いとなる。[4]街路の南端から北端までは歩いて約十分ほどだ。南端には橋があり、かつては城壁で囲まれた南方の都市に特有の吊り橋[5]がかかっていたが、今ではコンクリートの橋に作り替えられている。北端にも橋[6]があり、蘇滬公路につながっている。街路の中間には我々が鉄路洋橋と呼ぶ鉄道橋[7]がかかり、鉄道橋は小さな城北の町を空高く跨ぎ、毎日、南北に行き交う汽車が音をたてて通っていく。

我々の家、店舗、学校、工場[8]は、この三つの橋のあいだに押し合いへし合いしている。我々もこの三つの橋のあいだを行き来し、一年また一年と時を過ごしていた。

今、一人の男の子がカバンを背負い、鉄の輪を転がしながらやって来た。その子が鉄道橋のアーチの下をちょう

ど通ろうとしたとき、汽車が頭の上を轟音とともに通過して、橋桁の隙間から機関車がはき出した蒸気が落ちてきた。さらに窓からリンゴの芯が投げ捨てられ、足下にころがった。その子はひょっとすると私かもしれないし、二歳上の兄かもしれないし、隣近所の男の子かもしれない。だがいずれにせよ、私の少年期の生活の一場面だった。[9]

私はこれまで少年期は幸せだったなどとどうしてもいえなかった。実際、私の少年期はいささか寂しく、いささか心配な事が繰りかえしおきたからだ。両親は四人の子を抱える以外、基本的になにも持っていなかった。父は市役所のある機関につとめ、毎日、ボロの自転車[10]に乗って行き来していた。母は近くのセメント工場[11]で働いていた。若い頃は美しかった顔は中年を過ぎると、いつもむくんでいた。過度の疲労、また、様々な病気を抱えていたためだ。何年ものあいだ、両親は八十数元[12]の収入で一家六人を支えていた。そのような生活が辛かったのは想像に難くない。

母はすでに黄泉の国で眠っている。[13]今、母が籠を手に提げて工場へ出かけていく光景を思い出す。今でもハッキリと目に浮かぶのは、籠の中には弁当箱と靴底用の刺し子布[14]が入っていた。弁当箱は時には家で食べ残したごはんとおかずがつめられ、時にはごはんだけだったりした。また靴底は私たち兄弟に作る布靴のためのものだった。母は手先が器用だったが時間に追われ、仕事の休み時間を利用して靴底をすべて作らなければならなかった。

少年期のゆっくりとした時間の流れのなかで、私の記憶にないのは、童話、キャンデー、ゲームそれに大人からかけられた心ゆくまでの愛情だ。私が記憶しているのは貧しさだ。十五ワットのほの暗い電球がひとつ我が家を照らし、コンクリートを流していないじめじめしたレンガ敷きの床、粗末なカビ臭い家具、そして四人の子供が四角いテーブルを囲んで白菜肉糸湯（バイサイロースータン）[15]を食べ、二人の姉は細切り肉を二人の弟に分けるが、肉がもともと少なく、二、

三度手を出すと終わってしまった。

母はある時、酒屋に塩を買いに行って、五元札[16]を落としてしまった。ほとんど一日中、母はその五元札の落とし場所を探し求めた。しかしどうにも見つからないとわかった時、私は悲しげな母の泣き声を聞いた。母にいった。泣かないで。僕が大きくなったら、百元稼いであげるから。こういった時、私はまだ七，八歳の頃だったと思う。私は明らかに早熟で気遣いができた。ただ、母を慰めることにはなったが、私たちの生活にはなんの役にも立たなかった。

その頃一番好きだったのはお正月だ。お正月は、爆竹を鳴らしていいし、お年玉をもらえ、新しい服に袖を通し、ピーナツ、クルミ、魚、鶏それとふだん口にできない物を食べることができた。私の両親は街のすべての人と同様に、旧正月前後、子供たちが幸せに楽しく数日を過ごすのを喜んだ。

爆竹の屑、お菓子の包み紙、グワズ[17]の殻が街路からきれいに掃除された時、私たちの一年に一度の楽しみもそれとともに消えていった。登校、下校、宿題、ビー玉、メンコ[18]——早熟あるいは孤独癖だったためか、私はめったに街の子供の遊びに加わらなかった[19]。私がいつも遭遇したのは暗い耐え難い夕方で、両親が家で声を高めたり低めたりしてする口げんかだった。姉は避けて戸口のかげですすり泣き、私は軒下で、長々とした街路とせわしく行き過ぎる通行人を眺め、傷ついた心は憎しみで一杯だった。なぜ隣近所の家はけんかをしないのだろう。なぜよりによって我が家だけけんかが絶えないのだろう。

私が小さい頃から生活しているこの街路は、そののち、私の小説のなかにしばしば現れ、いうまでもなく虚構として「香椿樹街[20]」となった。町の人や事物はしばしば私の筆で書きとめられたが、ただ、少年時代の記憶は遙か彼

方であり、逆にまたとても鮮やかであることから、改めて拾い上げても、私には別の夢のようなぼんやりした感覚がつきまとっている。

私が学校に初めて入ったのは一九六九年の秋のことで、あいかわらず時代は揺れ動いていた。[21] 街路の塀はいたるところに標語とスローガンが書かれ、現在の子供たちにそれを聞かせてあげても、荒唐無稽で難しすぎるだろう。しかし、当時の子供はどの子も聞き慣れていて詳しかった。私が生まれて初めて間違いなく書けた文は街で見たもので、特にメリハリのきいた言葉、「革命委員会はすばらしい！」[22] だった。当時の子供は就学前の教育はなかったし、現在のようにコマーシャルやテレビ文化の洗礼を受けていなかった。しかし、街のいたるところの標語、スローガンが字を教えてくれた。どんなに愚鈍な子でも、「万歳」[23] と「打倒」のふたつの単語は書けた。

小学校[24] はかつての教会を作り替えたものだった。牧師がもとミサをしたホールは学校の講堂になり、児童はしばしば腰掛けを運んで並べ、そこで集会――おびただしい名目の批判大会や始業式が開かれ、昔ここでの宗教的儀式とまったくあい異なったことが行われた。ここの丸いステンドグラス窓の講堂および裏にある低学年用教室のヨーロッパ式小型建物は、街で一番瀟洒な建物だった。

私を一から教育してくれた先生は陳という先生だった。穏和で鬢（びん）を染めた白髪の女性教師で、先生の微笑みと優雅な物腰はどんな子供にとっても、一から教えてくれるのに相応しい教師だった。ただ残念なことに先生はかなりの高齢で、しかも緑内障にかかり、私が三年生になった時、先生は娘をつれて故郷の湖南に戻ってしまった。[25] その後、私の学生時代には多くの先生がいたが、一番尊敬する先生はやはりこの陳先生だった。それというのも、子供に一から教えてくれる事がとても珍しかったからかもしれないし、あるいは、あの混乱した時代にはめったに見られない優しい微笑みを失わなかったからかもしれない。

小学校二年生の時、大きな病気[26]にかかってしまい、休学した。毎日、病床で漢方薬を一杯、また一杯と飲んだ。それは人をさいなむ寂しい時間だった。同級の仲間たちが先生の計らいで、病人の慰問に訪れるとき、私は入り口の陰に隠れて出て行こうとしなかった。病気と特別な立場でもって彼らと面会するのが恥ずかしかったからだ。私は登校できなかったので、なんともいえない卑屈さと自己喪失感を味わい、そこで学校、教室、運動場、クラスメートをしばしば夢で見た。

私のそれらの同級生（小、中、高の同級生を含む）についていえば、私たちはひとつの街で大きくなった子供で、どの子でも、家の事、輝かしい事、恥ずかしい事もたがいに知っていた。何年かのち、私たちはそれぞれ離ればなれになったが、たまたま故郷の街角でバッタリと出会い、世間話をするうち、少年時代の思い出が軽やかに記憶によみがえってくる。私は彼らの話――南方の少年の話を小説に取り入れるのが好きだ。だが、彼らがその中から自分の投影だと気づくかどうかわからない。あるいは気づかないかもしれない。なぜなら、彼らは結婚して子供ができ、生活に終日忙殺され、これらの話を読む時間も興味もないからだ。

去年の夏、蘇州の家にしばらく戻ったが、ある日、石橋の上で高校時代の女の先生にバッタリ出会った。先生は私を見かけるなり最初にいったのは、宋先生が亡くなったのをご存じですか、だった。私はびっくりした。宋先生は私が高校生の時に教わった数学の先生で、クラス担任でもあった。私が憶えている先生はたしか歳が四十五を越えてなく、非常に謹厳で職業に誇りをもっていた先生だった。女の先生はいった。知っていた？　彼は肝臓ガンで、みんなは働き過ぎだといっていたのよ。私はその時なにをいったか憶えていないが、女の先生が最後にいったことばだけを憶えている。あんなに素晴らしい先生だったのに、あなた方はすっかり彼のことを忘れちゃったのね。彼

は病院で毎日学生が見舞いに来てくれるのを首を長くして待っていたのに、誰一人として来なかったの。死ぬ前にとっても悲しんでいたわ。

故郷の石橋の上で、私は数年来で一番重苦しい、自己を責める気持ちで一杯だった。胸に手を当てて自問すれば、確かに私は宋先生のことを忘れかけていた。この種の失念は現代の都市の人間によく起きる普遍的な精神状態のようで、かつての先生、同窓生、旧友のことをいつも思っている人は滅多にいない。人は何とはなしに過去との関係を断ち切り、自分の未来の設計を懸命に考えている。私にとって、過去の人と事物はただ私の小説の一部に過ぎなくなってしまった。私はそのため気が滅入った。そして過去を簡単に断ち切ってしまっていいのか疑い始めた。たとえば、あの夏の日の午後、あの女の先生が石橋の上で質問した、宋先生が亡くなったのをご存じですか、ということを。

過去を語ると、私はいつも思い出すのが蘇州の城北での少年時代だ。さらに思い出すのは十二年前の日、蘇州から遠く北京へ勉学に向かう途中の軽やかで広々とした気持ちと、車窓から見た見知らぬ村の上空に泳ぐ凧であり、畑や林で気ままに飛ぶ鳥の群れだった。凧と飛ぶ鳥、それは人の過去および未来の影なのである。[17]

一九九二・一二・一八

解題

「思い出すままに」（原題「過去随談」）は一九九三年『鍾山』第二期に掲載された。

蘇童にはこれまで散文集として、『尋找灯縄』（江蘇文芸出版社、一九九五年八月）、『捕捉陽光：蘇童語絲』（上海書店出版社、一九九六年三月）、『紙上的美女』（人民日報出版社、一九九八年一二月）、『蘇童散文』（浙江文芸出版社、二〇〇〇年一〇月）、『虚構的熱情』（江蘇人民出版社、二〇〇三年一〇月）の五冊が出版されている。短文と挿絵で構成している『捕捉陽光：蘇童語絲』以外は、いずれもこの「過去随談」が掲載されている。

ところで、なぜこの「過去随談」を訳そうと考えたのかは、以下の理由による。

蘇童の小説は、大きく三つの系列に分けられる、といわれている。たとえば、「蘇童意象」（王干著、『花城』一九九二年六期）では、三つの大きなイメージ構成として、

一．昨日の腕白小僧（背景は都市、古い町である香椿樹街から都市へ続く）

二．帰郷者（背景は農村、楓楊樹を主とする）

三．紅粉（背景は都市、女性の運命を主とする）

とに分けている。

これを訳者なりにわかりやすく言い換えると、一、架空の香椿樹街を舞台にしたもの、二、架空の農村である楓楊樹を舞台にしたもの、三、ある時代に生きた女性の運命を主題にした歴史もの、といえよう。そしてここで、問題としたいのが香椿樹街のものである。「過去随談」でも蘇童が述べているように、香椿樹街は蘇童が少年期を過

ごした蘇州の斉門外大街からイメージした架空の街である。蘇童が香椿樹街を舞台にした作品は非常に多い。

ところで、蘇童は『少年血』自序で、『桑園留念』が創作上、重要な意味をもっている事を語っているが、そこで、その後の短編を書いていくなかで、一本の狭い南方の古い街（のちに名前を香椿樹街と定めた）を書くことによって目鼻がたった、と書いている。蘇童にとって、のちに香椿樹街と名付けた街、すなわち彼が生まれ、育った街である斉門外大街を考えることから想像力が生まれ、香椿樹街シリーズと呼ばれる様々な作品に結びついていったといえるだろう。

そこで、香椿樹街をどのように語っているかを彼の散文作品で見ていくことにしたい。それによって、香椿樹街を背景にもつ小説へのイメージの飛躍の何分の一かを知ることができるのではないかと思う。

「思い出すままに」（「過去随談」）を訳したのは斉門外大街などを見ていくのに都合がいいと思ったからであり、また蘇童が過去の自分を語っている作品では、この「思い出すままに」が自分を一番吐露しているように思えるからである。

余談になるが、この作品は、『小説家檔案』（鄭州大学出版社、二〇〇五年九月）では、「小説是霊魂的逆光」（周新民整理）として掲載され、「心事重重的童年」という章立てになっている。「小学校はかつて～街で一番瀟洒な建物だった」という一段落がないほか、「、」と「。」の違いが数か所見られる。また、『蘇童研究資料』（山東文芸出版社、二〇〇六年五月刊）では、「蘇童創作自述」という章に「我的過去」という題名で掲載。また、『蘇童研究資料』（天津人民出版社、二〇〇七年七月刊）でも、同じく「蘇童創作自述」という章に「我的過去」という題名で掲載されている。

また、注で引用する蘇童の「我的自伝」（『作家』一九九〇年五期）は、いずれの『蘇童研究資料』にも、また

『尋找灯縄』『紙上的美女』にも「一份自伝」と題名を変えて載っている。

中国では同じ文章を題名だけ変えて出版するということがしばしば行われている。新しい本かと思って買うと、以前書かれた小説が題名を変えて出版されていることがある。出版倫理の確立が待たれると思うのは私だけではあるまい。

思い出すままに（「過去随談」）注

（1）作家蘇童の経歴を簡単に述べておこう。

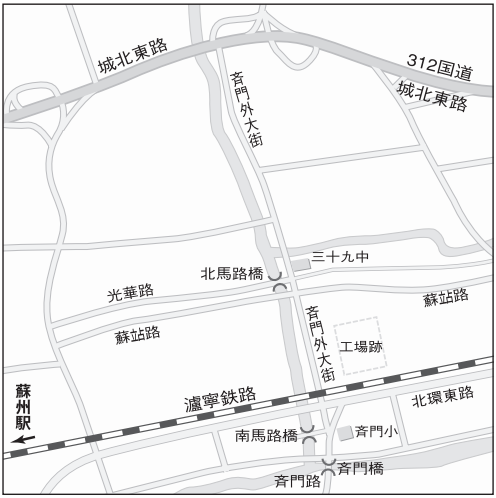
蘇童、本名は童忠貴、忠を中とする資料もある。一九六三年一月二三日に蘇州で姉二人、兄一人の四人兄弟の末っ子として生まれる。原籍は江蘇省揚中県であるが、現在は揚中市となっている。大学は北京師範大学で、在学中から詩、小説を書き始め、大学卒業後、南京の美術学院で事務職（輔導員）に就き、やがて文学雑誌『鍾山』の編集に加わり、その後、作家として独立し、現在は南京に住んでいる。拙文「『先鋒派文学』からの離脱――蘇童小伝そして余華」（アジア遊学『中国現代文学の越境』勉誠出版、二〇〇六年一二月）を参照していただければ幸いである。なお、主要な作品としては、『罌粟之家』『一九三四年的逃亡』『妻妾成群』『紅粉』『米』『婦女生活』『城北地帯』などがあり、このなかの四編が映画化されている。

（2）古い家並みだ　この街路が斉門外大街であるが、あとの文章に出てくるように小説にしばしば登場する「香椿樹街」となる。現在（二〇〇八年三月）、あたりは区画整理中で、建物は壊され、道路は整備中であり、昔の面影がわずかしか残っていない。このあたり一帯のグーグル（Google）の航空写真は、二〇〇八年一二月一〇日現在、区画整理、道路整備以前の写真であり、化学工場はすでに取り壊されているとはいえ、かえって蘇童が書いた昔の状況に近い。（グーグルの航空写真参照）

（3）灼熱の七月は～　「真夏の街路は熱気が立ちのぼり、プラスティックの夏用サンダルの裏は今にも燃えそうな感じであり、手で触った道路に面した家の壁や塀も熱かった」（「夏天的一条街道」より）とある。蘇童が虚構の「香椿樹街」を語る場合、このあとの冬の路面とともに、香椿樹街の街路を説明することが多い。

（4）凍てつく師走は～　「人々は江南の春は素晴らしい、というが、江南の冬は素晴らしい、という人はいない。私自身、季節の気温に対しての感じ方は普通だが、あり得ないことを望むとするなら、ここの気候が雲南の昆明のように、一年中春だといい。私は冬が嫌いだが、ある冬の日を思い出す。首をすぼめながら通学の路を歩いていると、突然我々の街の茶館から弦の音が聞こえ、そばに行ってガラス窓の中の熱気あふれる様子を見た。お爺さんたちが油染

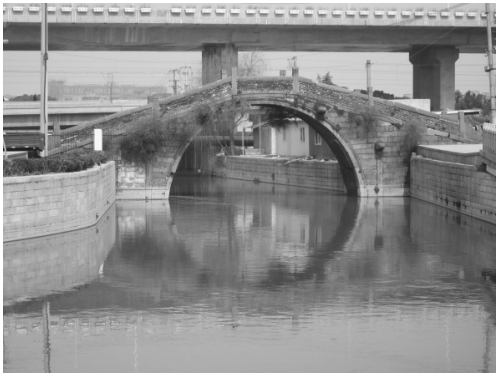
斉門外大街。上の橋が北馬路橋、下の橋が南馬路橋
（Googleの航空地図より、閲覧日：2008年12月10日）



蘇州・城北一帯

みたテーブルの向こうに座り、それぞれ熱い茶の入ったコップを捧げ持ち、男女二人組の蘇州特有の語り物をのんびりと聞いていて、少しも寒くないといった感じだ。私は当時思った。これらの老人は、かえって自分で楽しんでいる、と。現在、この冬の暖かな情景をあいかわらず覚えていて、こんなふうに冬を過ごせるなら、江南の冬も満更ではないと思った。」（「関於冬天」より）とある。蘇童にとって江南は、春も冬も素晴らしい、ということだ。

（5）吊り橋　斉門橋のこと。蘇童は「城北的橋」で、護城河に架かる斉門橋はかつて木の吊り橋で、敵の襲来には、橋をつり上げて蘇州城を守ったと書いている。現在はコンクリート製の大きな橋になっているが、近辺の人はあいかわらず「吊橋」と呼んでいるという。（写真参照）



南馬路橋。後ろに見えるのは北環東路

斉門橋。アーチ型の欄干がかかっている

（6）北端にも橋　斉門外大街は「数字蘇州　蘇州電子地図」では、斉門橋から滬寧高速公路に交わるところまでであるが、その他の地図は、蘇滬公路（蘇州と上海を結ぶ国道。現在、「蘇州電子地図」では城北東路がこれに当たる。グーグルの地図では国道三一二と書かれている）までである。この道路の橋である黄波涇橋が斉門外大街の北端に当たる。しかし、斉門からこの橋まで一、五、六キロメートルあり、約十分では歩くには少々無理がある。

ところで、「城北的橋」には、次のような文がある。

「清代に造られた石造りの橋が斉門外大街の南端と北端とにかかっている。南の橋は『南馬路橋』（引用者注：斉廟橋、朝天橋ともいう）（写真参照）と呼ばれ、北の橋は『北馬路橋』（引用者注：旧名は義成橋）と呼ばれている。そしてこの二つの石橋の間を割くように鉄道橋（写真参照）が架かっている」

「（家から）さらに五百メートルほど行くと、街は突然消え、郊外の田園風景となり、野菜畑、田んぼ、草むら、池、そして池には近くの農民が飼っているアヒルの群れが見られる」

「城北的橋」の文章から推察すると、ここに書かれている二つの橋、すなわち、北馬路橋から南馬路橋まで、蘇童の意識上ではその間が斉門外大街であり、また香椿樹街であったのではないかと思える。また、『蘇州旧街巷図録』（広陵書社、二〇〇五年九月）にも、北馬路橋の説明に「斉門外大街の北端に位置する」とあり、南馬路橋も「斉門外大街の南端に位置する」とあるから、斉門外大街は南馬路橋から北馬路橋までと考えている蘇州人がいるのは間違いない。

「二つの橋は南方でよく見かけるアーチ型の石橋で、同じ河の上を跨いでいて、多年、遠く向かいあって、一対の姉妹のようだ。確かに姉妹のようで、いずれも単孔橋で、橋の下を二艘の船が行き交うことができ、橋のたもとの両側には河に向かって石段があり、河辺の家ではよくその石段で洗濯をしていたし、また男の子が水遊びをするところでもあった。……私が覚えているのは、北馬路橋のたもとにある石碑に刻まれている文は清代道光年間であり、南馬路橋の歴史もおそらく同じようなものであろう」（「城北的橋」より）とある。ただ、北馬路橋にも南馬路橋の碑文にも、「同治六年三月重修」（写真参照）とあるから、あるいは蘇童の記憶違いかもしれない。道光年間は一八二一年～

一八五〇年であり、同治六年は一八六七年である。また、『蘇州旧街巷図録』には、北馬路橋は清の康熙年間（一六六二年～一七二二年）に改修されたとあり、南馬路橋は明の宣徳年間（一四二六年～一四三五年）に木製の橋から石橋に改修されたとあり、何度も改修されていたようだ。

また、蘇童が通った中学校・高等学校（蘇州市第三九中学）は北馬路橋の近くにあり、毎日橋のたもとを通った。時には母の工場（「逛網」の地図では光華水泥廠がこれに当たる）に行って昼食をとったり洗濯をしたが、十一段ある橋（現在、写真で見られるように、石段は三十八段ほどあったから、恐らく最近になって改修したのかもしれない）をカバンを背負って渡った。橋を渡ると、斉門外大街と垂直となる横街と呼ぶ短い街路があり、蘇童はこの清潔

斉門外大街。この辺に蘇童の旧家があった

南馬路橋上の碑。「同治六年三月重修」という刻文が見える

で短い街路が好きだったという。そして、蘇童の大学在学中に一家はここに引っ越しをしている。

橋のたもとにはかつて茶館があり、一面が河に、一面が橋に、一面が斉門外大街に面していた。小説「南方的堕落」では、「梅家茶館」として主舞台となっている。なお、橋は十三段だと書かれている。また、小説「橋辺茶館」では、最後に火事で焼けてしまうが、実際、この茶館は火事で無くなってしまう。

グーグルの航空写真では、斉門橋およびこの二つの古い石橋と鉄道橋とさらに鉄道橋に並んで北環東路が横切っているのが見える。

現在では近代的な西匯路が外城河の北側沿いに蘇州駅から東へ延びていて、黄波涇橋（この橋はグーグルの航空写真では映っていない）を経て、斉門橋で斉門路と交わり、そこから枝分かれして北上すると斉門外大街となる。また、北馬路橋の手前にも大きな橋（写真参照。この橋もグーグルの航空写真では映っていない）がかかって新たに蘇站路が横切り、様相がすっかり変わっている。（地図参照）

「過去随談」を書く際、蘇童の意識の中に、斉門橋から北馬路橋までを思い出し、南馬路橋の存在が抜けていたように思えてならない。北馬路橋からしばらく行った先は田園の中を通る道となり、蘇童の少年時代、斉門外大街と呼ばなかったのではなかろうか。道は国道三一二につながっていることから、やはり北端の橋は、北馬路橋がふさわしいように思える。

なお余談になるが、手に入る蘇州の地図の多くは観光のために作られているため、市の中心地から離れたり、観光スポットがない場所は、詳しく調べることが難しい。ネットを利用して蘇州の地図を調べているが、中心街からはずれている斉門外大街近辺など調べると、作成にいい加減なところが目につく。一帯の再開発が一九九九年から始まり、区画整理などの変化に追いつかないからであろう。また、もうひとつ考えられるとしたら、当局が正確な地図をこれまで一般に発表してこなかったからであろう。

（7）鉄道橋　この鉄道は上海から南京に行く滬寧線（北京まで通じていて、二〇〇七年に鉄道部は京滬線に編入し、正式には京滬線の滬寧段となっている）で、この鉄道橋は蘇州駅のすぐ近くにある。（写真参照）「城北的橋」に、約六

十年前に外国資本で作られたものだろうという通り、『中国鉄路建設史』（中国鉄道出版社、二〇〇三年三月）によると、イギリスに要請されて建設されたという。一九〇八年に開通している。ただし、『蘇州旧街巷図録』には、一九〇六年五月に滬寧鉄道は無錫まで通じ、蘇州駅で通車の記念式典が挙行された、とある。

この鉄道も蘇童にとって家の裏手にある斉門河と同じように、外の世界に通じる手段として大きな存在だった。「十八歳前に私は江蘇省の省境から出たことはなかった。鉄道橋の下を通るたびに、線路の終わる彼方に強い憧れの気持ちで一杯だった」（「十八歳出門遠行」より）とある。

（8）工場　蘇童が育った家は工場の正門のほとんど向いにあった。工場はベンゼンを作る化学工場（「逛網」の電子地図で

鉄道橋

北馬路橋上から斉門外大街を見る

は合成化工廠がこれに当たる）で、樟脳丸からそれを製造するためか、辺りは樟脳の臭いが漂っていた。（地図参照）

「それは、私の印象では化学工場の大きな煙突からはき出されていて、この臭いは鼻孔に入り込むだけでなく、我が家や隣人が外で乾かす衣服にこびり付き、時にはこの通りの空気となっているように感じた」（「童年的一些事」より）。

ここで萩野脩二氏の二〇〇八年四月三日付けのブログから、作家蘇童の臭いに関する指摘を長くなるが引用する。

……主人公頌蓮（『妻妾成群』の主人公――引用者注）はにおいをかぐことによって、雁児のただならぬ行為をかぎつける。そもそも登場する出だしからして、彼女は「散発出紙人一様呆板的気息。」と描写されるではないか。これは、『離婚指南』（『収穫』一九九一年五期）ではもっとはなはだしく、出だしは主人公の楊泊が部屋の小便くささを嗅ぎ取るところから始まる。「房間里有一種凝滞的酸臭的気味、」とある。……。

これらはもちろん、物のにおいだけでなく「聞到気味児」は「知道情況的気雰」であるから、情況やその社会的ムードを表現しえる。彼の作品がほとんど「蒼涼cangliang」とした感じなのも、嗅覚の鋭さというか物の本質を捉える一手段として「におい」を注視しているからであろう。決して意図的な注視でなく、本能的な重要視であるから、彼の語り口に引き寄せられ、彼の自然と発するふか～いどうしようもない諦めの感情に浸らせられるのであろう。それはニヒリズムではないと思うが、蘇童という作家には表面ではわからない、少なくとも視覚だけではない、嗅覚の鋭さと深遠さがあると思った。

蘇童に対してのするどい指摘だと思う。蘇童が臭いに敏感なのは、この育った環境と切り離すことはできないのではなかろうか。それが小説でも表現されていると思う。

(9) 今～だった。　一人称で自分を語っていた文章がこの段落は、いわば現在の「作家」の視点から叙述している。これとパラレルな関係にあると思えるのが、森岡優紀氏の「蘇童の小説における叙述の二重構造」（『野草』六六号。二〇〇〇年八月）である。蘇童の小説で「過去の出来事を回想する『我』と、当時のことをリアルタイムに体験する『我』」とを叙述する文章がいり交じっていることを考察していて、蘇童の文章の核心を突いているように思える。

(10) ボロの自転車　蘇童は父の自転車を借りて、にぎやかな北局へこれといった目的もなく行き、掲示板の新聞を読ん

だり、行き交う人々の中から、蘇州の人間以外の発音を聞いたりしていたという（「蘇州北局」より）。北局とは、市の中心に位置する小さな公園で、近辺は蘇州で一番繁華な場所である。明代、皇室へ進上する絹織物を作る織染局がここにあり、清代、城南に織造局が造られたため、ここを北局と呼ぶようになったという。

また、主人公の達生が黙って父の自転車を借り、父は仕方なく借りた自転車で仕事場に急ぎ、交通事故で亡くなる、という場面から始まるのが、小説「城北地帯」である。この話のもとになるであろう話がある。「不要急」によると、実際に斉門外大街で自転車事故があった。それはある雨の日、仕事場に干していた乾いたオムツを持ってくるよう妻から頼まれた若い夫が、急いだためトラックにひかれて亡くなる、という痛ましい事故だった。

自転車の所有者割合は、一九七八年段階で、百人当たり七、七台（国家統計局編『中国統計年鑑一九八一年』より）で、当時自転車はまだ貴重品であった。

（11）セメント工場　前述したが、「逛網」の電子地図では光華水泥廠がこれに当たる。蘇童の家の裏窓が河（正式には斉門河と呼ぶようである）に面していたが、その河の対岸にあった。二〇〇八年三月現在、すでに更地となっていた。「なんともおかしな話がある。それは、ある年の冬、河が凍り、母は対岸の工場へ急いで行こうと焦っていたので、時間に間に合うよう、軽はずみにも氷の上を渡ろうとした。だが氷は薄く脆く、足下で氷が割れる危険な音が聞こえ、身をすくめた。しかし戻るのも危険で、そこで母は祈りながら対岸へ渡ったことがあった」（「河流的秘密」より）。恐らくこの話をもとに、小説「刺青時代」の冒頭は、主人公の母が臨月の身で氷の上を渡っていき、氷の上で子供を生んだ話が書かれている。また、「我的自伝」では、自分が生まれた日、母親はもともと夜間勤務があり、工場へ行く予定だったが、急に産気づいて生まれたという。蘇童が「河流的秘密」で、「なんともおかしな話がある。」といっているのは、蘇州でどんなに寒い冬でも、人が渡れるほど厚い氷が張るはずがないと思っているから、母のこの話が信じられないからである。

なお、この河は常熟市に通じている。そして行き交う多くの船の中、常熟へ行く客船が一番好きだった、という。

また、艀（はしけ）に自分と同じような年齢の子が両親と乗っているのを見ると、船上の生活に神秘的な誘惑にかられた。熱

心に船を見ている自分に、母親は、よく親が子供にいう冗談をいった。「お前は自分の子ではなく、船から拾ってきたんだよ」（「船」より）。

やがて船が好きな少年は、船乗りになりたいと考えた。ところが、「高校受験で、南京の海員学校を受験するも不合格だった」（「船」より）という。合格していたら、現在の作家蘇童は生まれなかったかもしれない。

また、六、七十年代までは、経済も停滞していたこともあり、河の水はきれいで、淀んでいなかった。やがて水は淀み、ゴミが浮かぶ河となる。「私が裏窓から見たのは、一本の重苦しい河であり、汚れた河であり、ホームシックに罹った河」（「河流的秘密」より）となっていった。

子供時代の蘇童は、この河が、住きにつけ悪しきにつけ遠い世界へ通じる「道」と感じていたように思える。蘇童の想像力の源泉のひとつにこの河の存在を忘れてはならないと思う。

（12）八十元　たとえば、蘇童が十歳になった一九七三年の都市の役人の平均年収は六五九元で、月収にすると五四、九元である（国家統計局編『中国統計年鑑一九八一年』「暦年全民所有制各部門職工平均工資」の「機関団体」より）。母親は、セメント工場に勤めていたことから、「工業」の項を見ると、年収六一四元で、月収にすると五一、一元である。蘇童は一九七〇年前後に少年期を過ごしたが、前後の数値に大差はない。そこから類推すると、夫婦二人の合計額が八十数元というのはかなり低い部類に属するのではなかろうか。

（13）～眠っている　一九八九年春、蘇童が小説「妻妾成群」を執筆中、六月四日に天安門事件が起こり、仕事が一時中断する。そしてこの年の国慶節直前、母親がガンとわかり、大きなショックを受ける。母親が手術を受けた数日後、病院へ行く途中で買った『収穫』に「妻妾成群」が掲載されていた。一九九一年、「妻妾成群」が張芸謀によって映画化され、原作者の蘇童の名が広く知られるようになったが、母親はそのことを知ることなく、九〇年七月に亡くなった。蘇童にとって「妻妾成群」は、「自分にもたらされた幸運は母に悪運をもたらした」（「年復一年」より）という。いずれにせよ忘れられない作品となったことは間違いない。

（14）靴底用の刺し子布　布靴は歩きやすく、多くの人が布靴を履いていた。特に農村では、嫁入りの条件として、布靴

をうまく作れる事が求められた。劉慶邦の「靴」（『北京文学』一九九七年一期）などを読むとそのことがよくわかる。むろん都市でも布靴を履いている人がかなりいたわけであるが、家計の厳しい家などは当然、自家製の布靴だった。靴底は余ったボロ切れを使い、丈夫にするため、何枚も布きれを合わせて刺し子をした。この作業を蘇童の母は会社の休み時間などを利用して、家族の布靴を作ったのである。

（15）白菜肉糸湯　白菜と細切りの豚肉が入ったスープ。肉が少ないとなると、非常に安価であることがわかる。

（16）五元　夫婦二人の毎月の給料が八十数元のところから考えれば、これは大きな額であったことが分かる。ところで、蘇童が八歳の一九七一年当時、一ドルは二・二四元に固定されていた。日本ではニクソンショック後のスミソニアン協定で、一ドルが三六〇円から三〇八円になり、このレートで換算すると、五元は日本円の約六八七円になる。当時の日本でも六八七円はかなり価値があった。社会主義下の中国では、日本と簡単に比較はできないが、生活物価が非常に安く、五元は単純換算した以上に大きな価値があったことは間違いない。余談になるが、日本は高度成長期で、大卒男子初任給は約四万一千円（現在は二〇万円ぐらい）で、その当時の一時期は、一年ごとに一万円近く上昇している。（展望社「物価の文化史事典」より）

（17）グワズ　西瓜やヒマワリの種を干して、油で炒めたもので、お茶請けに使われる。テレビで大リーガーの選手がこのグワズをベンチで食べているのを見かけたことがある。世界性をもったお茶請けになるかどうかわからないが、これをうまく食べられないと、中国人の世界に入っていけない、と感じさせるものであることは間違いない。中国の映画館などに行くと、椅子の下にこの皮のカスが散らばっていることがよくある。

（18）メンコ　原文は「拍烟殻」。一説には、タバコの空き箱を平らに延ばし、それを折って作ったもので、相手のものを裏返しにすると勝ちになるという遊びで、まさしくメンコだ。もう一つの説は、やはりタバコの空き箱で作ったメンコ状のものを手で叩いてひっくり返し、別のカードにつけると、そのカードをもらえるという遊びだ。私が子供の頃は、紅梅キャラメル（当時値段は一箱十円）に入っていた読売巨人軍の野球カードで遊んだ記憶があり、その遊びを「ポン」と呼んでいた。蘇童の友達が遊んだのはどちらであろうか。

(19) ～遊びに加わらなかった。「我的自伝」にはつぎのように書かれている。

「二番目の姉は文学が好きで、たくさんの文学の名著をよく持って帰ってきた。それは他の人から借りてきたものだ。借りてる時間は往々にして短く、三日から五日だった。姉は一日でそれを読み終えると私に回した。私は時には午後だけで『復活』あるいは『赤と黒』を読み終えたが、頭がくらくらして、要領を得なかった。だが、笑ってしまうようなこのような大雑把な読み方に、今でもあいかわらず固執している。もしかすると、これらの本のおかげで、街の少年たちの悪い遊びから逃れることができたのかもしれない。私はいつも静かに家にいて、ある種の幻想的な精神を育てていた」

いわば文学によって、街の少年と別の生き方を選ぶようになったわけであるが、後述する一時期病気であった事も大きかったのではなかろうか。

(20) 「香椿樹街」最初に述べたように、蘇童が少年時代に過ごした斉門外大街が小説に出てくる香椿樹街になる。ただ、小説「城北地帯」では「香椿樹街には実は香椿樹が一本もない」と書かれている。また小説「舒家兄弟」では、「香椿樹は、香椿樹街ではとっくになくなり、街路の両側の樹は紫槐と梧桐である」とある。

香椿は『大辞泉』で、チャンチンとフリガナされ、「センダン科の落葉高木。葉は卵形の多数の小葉からなる羽状複葉。若芽は赤く、独特のにおいがある。七月ごろ、枝先に白い小花が密生して咲き、実は秋に熟して五裂する。中国の原産。材を家具などに用いる。」とある。街の名前を香椿樹としたのは、独特の臭いを発する樹木、というところに蘇童は惹かれてネーミングしたのであろうか。

二〇〇八年三月現在、訳者の現地調査によれば、旧工場近辺の道路には街路樹は無く、河に面して樹木が植わっていたところがあったが、それが果たして紫槐と梧桐であるかは不明。なお、李若夢「蘇童与魏紅」(『重慶晩報』一九九九年四月九日)によると、蘇童は「いたるところ竹の生い茂った庭のある家で生まれた」とある。竹が生えているようなところはすでに無かったように思う。

(21) ～時代は揺れ動いていた。文化大革命の時、対岸のセメント工場の武闘では、蘇童の家にも流れ弾が飛び込んで

きて、比較的安全な外祖母の部屋に避難している（「年復一年」より）。蘇州での文化大革命がどのようであったか、『蘇州往事図録』（広陵書社、二〇〇八年二月）によると、つぎのように要約できる。

一九六七年一月、造反派は「蘇州市革命造反派連合総指揮部」（略称「蘇革会」）を作り、蘇州の党、政治の実権を握った。ところが奪権後、矛盾が生じ、〝支〟（支持「蘇革会」）と〝踢〟（踢開「蘇革会」）の二派に分裂した。これまで穏和な蘇州人といわれていたにも関わらず、文闘から激しい武闘が始まった。一九六七年七月二十四日から一九六八年二月十日までに、大きな武闘が二十六件起こった。そしてわずか半年あまりで、死者百八十七人、負傷者五百人余という犠牲が出たという。

おそらくこの期間に、蘇童の家に流れ弾が飛び込んできたのだろう。

(22)「革命委員会はすばらしい！」「少しふざけていうと、一番早い創作は子供時代にコンクリートの地面にでたらめに書いたものだ。私はかつて化学工場の入り口で白墨で壁に、『革命委員会はすばらしい』というスローガンを書き、人々から賞賛を受けた。その時はまだ就学前の子供だった」（「答自己問」より）。

(23)「万岁」「岁」は「歳」の簡体字で、「万歳」の意味である。当時、江衛兵達は毛沢東に向かって、「万岁、万岁、万万岁」といっていた。

(24) 小学校　崇道小学（斉門小学）のこと。崇道小学は一九二四年秋に、私立崇道小学として創立された。この名はアメリカ中華キリスト教会崇道堂に属していることから命名された。解放後の一九五一年、斉門小学と名を改めた。やがて斉門小学は蘇童が通っていたところから斉門橋のそばに移転する。移転して二年後の創立七十周年に、蘇童は来賓としてよばれ、かつて教わった先生方と会っている（「母校」より）。そして二〇〇八年五月三〇日、これまでの校舎の東側に新たな校舎を造り、名も再び蘇州市崇道小学と改めている。

(25)〜ふるさとに戻ってしまった　陳先生は小学校の唯一の宿舎（教室の二階）に娘と住んでいた。先生が故郷へ戻るとき、道を歩いていた蘇童は、思わず「陳先生！」と叫んでしまい、急いで近くの他人の家の門脇に隠れた。先生は、蘇童の名前を呼ぶと、「暗くなるから、家に帰りなさい！」といった。緑内障の先生には自分の姿が見えないはずで、

声だけで名前が分かる教師の力に驚いている。そして二十数年後でも、耳の底に先生の「暗くなるから、家に帰りなさい！」という声が残っている、という（「初入学堂」より）。

(26) 大きな病気　重い腎炎だった。「医者は私に塩分を取ってはいけない、といったので、医者のいう通り、約半年のあいだ、塩一粒ふれなかった」（「我的自伝」より）。

ところで、漢方で治すことになったが、苦い漢方薬を飲むのがつらく、ある時、学校へ行ってしまえば薬を飲まずにすむと思って、母の目を盗んでこっそりと出かけようとした。すると、薬茶碗を持って入り口に立っていた母から、「死にたいの？　死にたくないなら戻って薬を飲みなさい！」と、いわれた。そして死の恐怖が九歳の時から始まったという（「九歳的病榻」から）。文学を志す契機に「死」という要素が考えられる場合がしばしばある。この大病の経験が蘇童という作家の成立に果たした影響は大きかったと思える。

(27) ～影なのである。　十八歳で家を離れることになったが、それまで四回ほど遠出をしているという。一回目は八歳の時、父親に連れられて上海へ二日ほど出かけた。この時のスチュエーションが小説「紅桃Q」であろう。二回目は十歳の時、母方の祖母と叔父につれられて故郷に帰った。三回目は中学生の時、作文コンクールで南京に行った。四回目は中学卒業前に無錫へサマーキャンプへ行った。以上が「十八歳出門遠行」に書かれているが、「在農村辺縁」には、姉が知識青年で、長江に近い農村に「下放」されていて、ある夏休みにそこへ行った、という話が載っているが、遠出の数に入っていない。

ともあれ、これまで育った斉門外大街を離れ、北京の大学生活に入るということは、所与のこれまでの人間関係から、自分で新たに作る人間関係に入ることでもある。これまでの世界との結びつきとそこから開放される気持ちが、凧と鳥で象徴しているのであろう。

「汽車が動き出した後、私はこれから本当の遠出になるとはっきりと意識した。私は目を大きく開いて窓外の原野を眺めた。江蘇、安徽、山東、河北の四省が二十時間のうちに、つぎつぎとかすめ過ぎて行った。私はこれから人生が豊かな、素晴らしいものになると思った。」（「十八歳出門遠行」より）。